

## 21世紀の日本のかたち（36）

### のぞましい人間居住 (Desirable Human Settlements : Futures of Relevance)

—世界居住学会インド（ムンバイ）集会 2010 報告—



戸沼幸市  
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

#### 1. インドの印象

今年の世界居住学会 (The World Society for EKISTICS) はインド・ムンバイ (ボンベイ) を主会場として、2010 (平成22) 年11月7～13日に行われました。日本、台湾や欧米からの参加者の他に地元インドの方々が大勢参加し、中国と並ぶ巨大人口国の望ましい未来の人間居住に強い問題意識をもって議論に加わってきました。

今年度の会議には常連の中国勢が不参加であったのは残念なことでした。中国(2000年12.5億人、2050年14.0億人)とインド(2000年10.5億人、2050年16.5億人)という、アジアの二つの巨大人口国

を考えることは全く興味深いことです。

今回、私は11月8日、全日空便 PM12:10成田発、PM19:45ムンバイ着でインドに出かけました。時差は3時間、10時間程の飛行時間です。飛行機の小窓からずっと下を見ておりましたが、九州を離れて問題の黄海、東シナ海を横切って中国上海に入り、長江沿いに西へと進んで、赤茶色の中国内陸部を眺めた後、貴陽、昆明からチッタゴン間、雨雲の間から蛇行する幾筋もの大河を認めました。機内にあった航路図でみると、チベットプレートから縦に南下して流れ出しているメコン川、サルウィン川、エーヤワディー川らしいのです。

#### 成田～ムンバイの飛行ルート



資料：全日空機内誌

これらの川は、ヒマラヤ、チベット高地の豊かな水を南シナ海、ベンガル湾に注いでおり、これら長大な河は山と海をつなぎ、流域に緑濃い一大平野をつくり出しているのだと改めて得心しました。ただここにも地球温暖化の影響が現れているらしいのですが。そしてガンジス川河口を認めたことで、バングラデシュからインドに入ったことを知りました。

インド上空は雲に覆われておりましたが、この雲の下に五千年の文明史をもつインドの人間居住、莫大な人口をもつインドという国があることに何故か胸騒ぎを覚えました。

私にとってインドは1976（昭和51）年3月、一年間のギリシャ滞在の後に、日本への帰路に立ち寄って以来34年ぶりです。飛行機はほぼ定刻通りに市街地の中のムンバイ国際飛行場に着陸しました。34年前と違って、空港ターミナルビルはよほど大きくモダンな構えをつくり出しているなど感じながら、機内に預けた荷物を受け取り、空港の外に出たのですが、途端に34年前が甦ってきました。午後8時すぎだというのに、空港の周りには人間が一杯で、人混みの強い圧力は以前にも増しているのです。

予約しておいたホテルはニュームンバイにあり、ここに行き着くためにはタクシーを拾って空港のあるムンバイ市街を抜けてゆくことになるのですが、車が全く多くなり渋滞つづきで人と車をかきわけて進む間中、物売りの子供に幾度も窓を叩かれました。

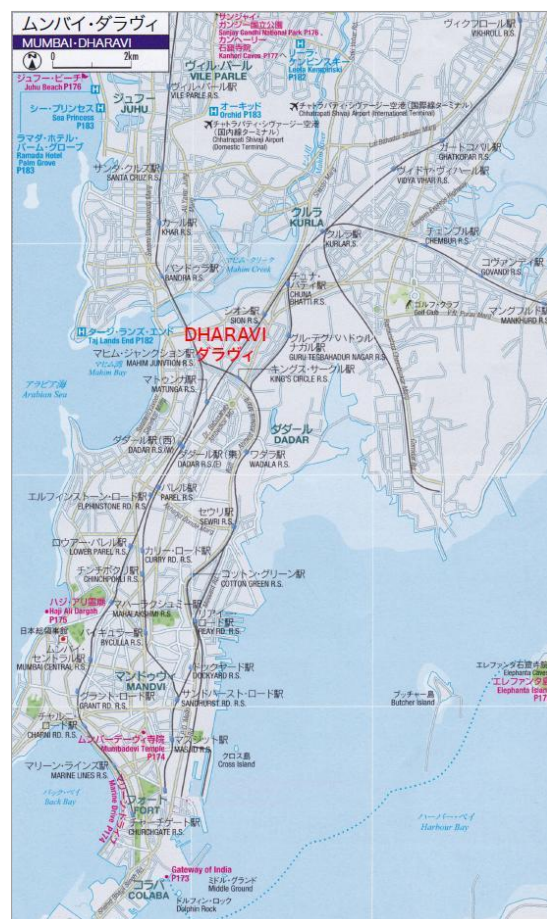
なにしろ1950年3億7千万人、1970年5億5千万人、そして現在12億人なのです。巨大な人口圧がムンバイの私の身近に押し寄せているのかと改めて思ったことでした。

今回の私のインド訪問の目的の一つには、やがて（2030年頃）中国を抜いて15億、16億人になる

と予想されているこの巨大人口国インドが、いかなる人間居住をつくらうとしているのかを知ることでした。

ムンバイには昔からアジア最大のスラム、ダラヴィ（DHARAVI）があることはよく知られています。これが空港の玄関先にまできており、現在、スラム人口は100万人にもなるということです。ダラヴィについても、今度のWSEの会議でインドの人びとに改めてたずねたいと思いつつ、人と車で渋滞のつづくムンバイ市街を通り抜け、ようやく河をわたって大陸側に出来つつあるニュームンバイのホテルに着いたのは真夜中でした。

### ムンバイ・ダラヴィ



資料：JTBパブリッシングを加工



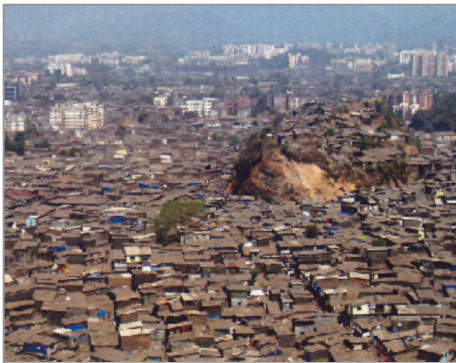
## 2. WSE会議

### ムンバイ・ボンベイ・ダラヴィ

WSE会議は、第一会場がムンバイ市内の中心部にあるタタ (TATA) の研究所のホール、第二会場は古都に重なる先端都市プネー (Pune) の大学の講堂、第三会場はプネーから2時間程の高地に入った保養地ラバサ (Lvasa) のコンベンションセンターで行われ、参加者は全12セッションを熱心に議論したことでした。

私の関心のあった話題は、先ずダラヴィに関するもので、これについてHarshad Bhatia氏がムンバイ (ボンベイ) に重ね、詳しく報告をしてくださいました。氏の話のを要約しますと、次のようなものでした。

#### アジア最大のスラムーダラヴィ



資料：WSE

□ムンバイ (ボンベイ) の歴史については、

- ・ムンバイはもともとコーリーという漁民の暮らす島であった
- ・16世紀 ポルトガルがやってきてボン・バイア (良い港) と名付ける
- ・1661年 イギリスに譲渡 (ボンベイとする)、イギリス統治の一つの拠点となる
- ・19世紀 7つの島を統合する埋め立て工事完了  
鉄道敷設、輸出港として栄え、市内に紡績場などが造られる
- ・1885年 インド国民会議派の第一回大会をボンベイ

で開催

- ・1947年 インド独立
- ・1995年 ボンベイからムンバイに改名
- ・ムンバイの人口については、急速な都市化、1901年100万人都市、2010年1,500万都市になる
- ・最近の話題として、2006年列車同時爆発テロ、2008年ムンバイ同時多発テロ (タージマハル・ホテルなど)
- ・ダラヴィはムンバイが漁村から近代都市に変貌する過程で1920年代、たくさんの下層カーストが流入し、スラムを形成  
1980年代、40万人といわれていたスラム人口は、現在、100万人

□ダラヴィの位置はアラビア湾につながるマヒム湾、マヒムクリーク、ヒム川沿い、西と中央の二本の鉄道路線に挟まれた地域一帯に広がっている

- ・ダラヴィ最大の弱点は、上下水道のインフラの欠如で、モンスーン時 (雨期)、洪水で排便箇所が使用不可能になること、最悪のケースでは川そのものがトイレになってしまう

スラム住民は最下層のカースト、シュードラ (隷属民) である。更にその下のパンチャマ (不可触民) (注)

宗教はヒンズー、モスLEM、仏教、キリスト教と様々、ちなみにインドではヒンズー教が80%を越えている

- ・生計 (経済) は皮なめし、ゴミの収集、リサイクル業、伝統的陶器づくり、衣料づくりなど (一部屋サイズの工場無数にあり)、その他、様々な都市肉体労働

ダラヴィはインドの恥か? 外国人の訪れる国際空港、インドの玄関先にあるアジア最大のスラム

生ゴミをあさる人々、不法居住者、時にテロリストのかくれ家、無数の閉じた過密コミュニティの不連続的集合、清潔感を欠く汚い景観

- ・しかし、ダラヴィはムンバイにおける大きな労働力

の供給基地である

農村からやってくる下層民の切実な居住地であり、  
都市と地方農村を結ぶマグネットである

- ・ダラヴィの再開発については、市政府や建築家、都市計画家が様々に提案をしているが、結局、住民を切り捨てることになり成功していない  
生存と生活の境界線上にあるとはいえ、ダラヴィには住民の自助努力の上に築かれ、また様々なNPO、ソーシャルワーカーが入り込んでこの居住の持続を手助けしている

Bhatia氏は以上要約し、ダラヴィはインドの本質だと結論しているのです。たしかに、その背後には12億から15、16億人に向かう巨大人口国インドの現実があるのです。そして、アジアの人間居住全体に関わっている事態でもあることは確かです。

### 光と陰が混ざり合う地球における人間居住

WSEの会議はムンバイから内陸に車で3時間程の第二会場プネー（Pune）へ移りましたが、ここはデカン高原の西にあり涼しくて暮らしやすく、人口500万人弱、日本の岡山市とは姉妹都市です。世界中から7万5,000人の研究者、学生が集まっており、「インドのオックスフォード」と言われているとのこと。プネーは古くからの都市で、インド学の有名な研究所もあり、また、ITなど新しい科学技術・産業関連のいくつもの施設、研究所、大学が集まっており、研究・学園都市の雰囲気がありました。

デカン高原の南にはインドのシリコンバレーといわれるバンガロールがありますが、インドにはIT産業をはじめ、新しい知的産業の拠点が方々に生まれている様子です。

プネーでは落ち着いた大学の講堂で、地元の建

築家からこの都市の概要について、学生と一緒に講義を受けましたが、少なからず、インドの知的雰囲気を味わいました。

第三会場はプネーからさらに高原へ、保養地ラバサのダム湖畔にあるコンベンションセンターで行われました。ここには大都市ムンバイをにらんだ大保養地計画があり、地元のTVで盛んに宣伝しておりました。

この第三会場ではアメリカ、EU国の参加者から自国の人間居住について報告がなされました。その中で、アメリカのソーシャルワーカーからロサンゼルスの上層生活者の実態報告があり、都市の光と陰が浮き彫りにされ、この保養地と何か面白いコントラストでした。

今世紀、グローバル化が進む人間居住において、光と陰、先端と後進、豊かさと貧困がモザイクの様に、そしてダイナミックに絡まり合っている様子を各国の報告者がこもごも語り合いました。

今回の会議で、私どもの研究所からは私と吉田拓生副理事長が参加しました。吉田氏は人口減少、少子高齢化時代に入った日本の人間居住について、日本の国土政策、東京圏計画について江戸の話題を含めて紹介しました。特に、300年間持続された江戸の町人、職人の高密度居住についての報告は、リサイクルの見事なエコロジカルな都市であることが参加者の興味を惹いた様子でした。これはムンバイのスラム、ダラヴィ再生のヒントになるかもしれません。

私はこれに関連し、インドを含めたかたちの「東アジア共同体の枠組みと課題」について、日本開発構想研究所編集の資料「各国の国土政策：An Overview of Spatial Policy in Asian and European Countries」を提供し、話題としました。

折しも日本の横浜においてAPECの会議が行

われ、アジア太平洋、東アジア地域の協力、共同の構築が政府間で話し合われておりました。

インドについては、日本でも最近にわかに話題になっております。

一人っ子政策でやがて急速な人口減に向かうと予想される中国に対し、10億、12億、15億へと巨大人口増を続けるインドの動向は、政治的にも経済的にも、アジアはもとより世界大での大きな影響を与え始めております。

地球居住は小さなスケールでも大きなスケールでも新しい問題が噴き出しています。

WSEの次年度の会議はニュージーランドのオークランドで開催することを決めました。

私としては、東アジア共同体など文明圏レベル

の人間居住について、地球儀を逆さまにして海洋から、南半球から改めて眺めてみたいものと考えながら、ひとまずWSEの会場を離れ、ニューデリーへと向かいました。

(次号以降に続く)

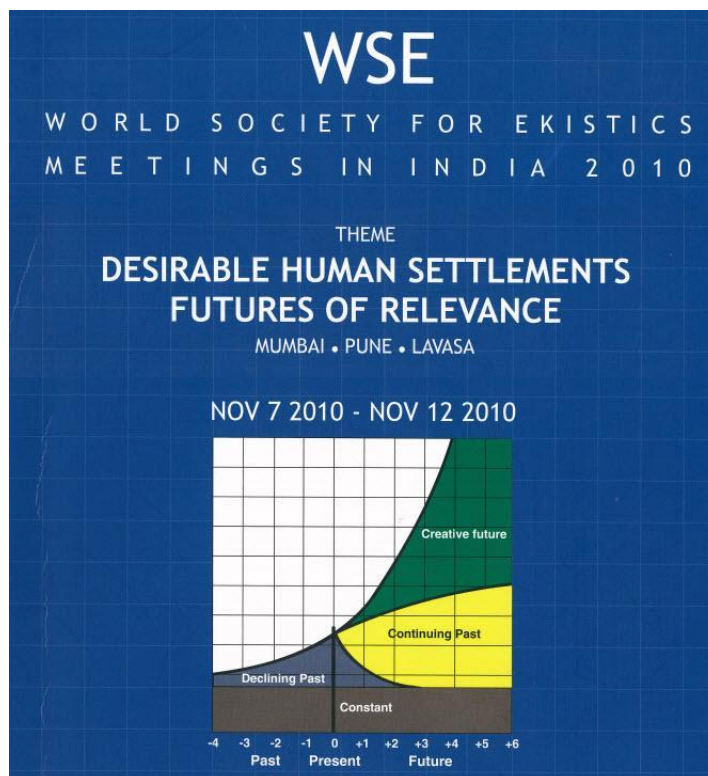
注) カースト:バラモン(司祭)、クシャトリア(武人)、ヴァイシア(商人、一般庶民)、シュードラ(隷属民)、バンチャマ(第五のカースト・不可触民)の階層身分制度

#### 【参考文献】

「インド、スラム・レポート」伊勢崎賢治著 明石書店 1987.6

「MUMBAI BOMBAY DHARAVI」Harshad Bhatia WSE 2010  
インド・ムンバイ会議 ABSTRACTS 2010.11

#### WSE インド・ムンバイ会議での資料表紙



(2010.12.15)